印欧語としての英語とドイツ語(1)

飯嶋一泰

はじめに

「ドイツ語は英語よりむずかしい」とか、「いやロシア語に比べればまだ可愛いものだ」などということが時として話題に上るが、言語の習得の難易度には実は次の二つの側面がある。ひとつは、当該の言語体系（音韻・形態・シンタクス・語彙・文字など）そのものが複雑か否かということである。そして、いまひとつは、その言語が学習者の母語（ないしはすでに習得した言語）からどの程度隔っているかということである。この隔りは、主として系統的なものを意味するが、偶然の構造的（類型的）相似性や言語接触による親近性も一定の役割を演じうる。

難易度のこれら二つの側面のうち第一のものは、比較的客観的に判定することができる。たとえば、形態の分野においては、複雑きわまりない語形変化をする古代インドのサンスクリット語の方が、語形変化を大部分失った現代英語より難しいと言っても、誰も異を唱えないであろう。

これに対して、第二の側面は、学習者の置かれた境遇、すなわち母語が何語かということによって大きく左右される。母語と習得すべき言語の隔りが問題となるので、単純に何語が易しくて何語が難しいとは言えないわけだ。

この言語間の隔りという観点からすると、我々日本語を母語とする人間は非常に分が悪いと言わざるを得ない。なぜなら、日本語と系統を同じくする言語は、おそらく琉球語以外に存在しないからである。[2] 類型論的に見ると、朝鮮語やモンゴル語が、いわゆる膠着型（分離可能な形態素――日本語の格助詞のようなもの――の付加により文法関係を表す言語類型）であり、かつOV型（目的語を動詞の前に置く型）である点で、日本語に近いと言えるが、それ以外の点ではほとんど共通項は無い（朝鮮語における漢語系借用語彙を除く）。言語接触による親近性に目を向けると、日本語は漢字という文字体系の移入を通して中国語に若干歩み寄っている。漢字を知っているということ自体は、中国語を学ぶ場合少なからぬアドバンテージと言える。しかし、漢字の音韻が中日両語で大きく隔ってしまっている点、また日本語には声調が欠けている点を忘れて、甘く考えると、痛い目に遭うことになる（何を隠そう筆者自身も坐折した）。

日本語を母語とする人間が置かれたこの状況は、たとえてみれば小さな相撲部屋の力士のようなもので、あらゆる対戦相手（言語）と正面切って取り組まねばならない。同じような境遇の言語としては、我々に馴染みのあるところでは、朝鮮語、アイヌ語、バスク語等を挙げることができよう。

これに引きかえ、現在ヨーロッパで話されている諸言語は、その大半が印欧（インド・ヨーロッパ）語族indoeuropäische Sprachfamilie[3]と呼ばれるひとつの大部屋ないしは大家族に属す同系の言語である。例外はウラル語族のフィンランド語、エストニア語、サーミ語（ラップ語）、ハンガリー語等、チュルク語族のトルコ語、ガガウズ語等、アフロ・アジア語族のマルタ語、そして上述の孤立したバスク語であるが、これらの言語の話者の総数は、ヨーロッパの全人口の数パーセントしか占めない。残りの九十数パーセントは印欧語族の言語を話している。[4] つまり、大部分のヨーロッパ人は、外国語学習に際して大きなアドバンテージを持っているということになる。[5] 時として数言語を流暢に喋る人間がいるのも不思議ではない。しょせん親類

縁者の言葉なのだ。

しかし、我々もこのハンディーに意気消沈するには及ばない。印欧語族の諸言語のうちのひとつをまずある程度まで習得すれば、その知識を次の言語の学習にかなり応用することができるはずである。その応用の実際は、授業や自主学習に委ねるとして、小論ではそもそも印欧語族とは何か、これに属する諸言語（特に英語・ドイツ語）は互いにどのような関係にあるのかということを、できるだけ平易に解説し、勉学の参考に供したい。

一　印欧語族とは何か

さて、上に現代ヨーロッパの諸言語はその大半が印欧語族に属すと述べたが、実はこの語族は、その名が示すとおり、ヨーロッパから小アジアを越えてイラン、インドにまで断続的に広がる大語族である（近代の植民地化に伴う英語、スペイン語等の全世界的規模における普及は度外視する）。

語族とは、互いに親縁関係にあり、共通の祖語 Ursprache に溯ると考えられる言語の一群のことである。[6] ヨーロッパからインドに至る数多くの言語が、ひとつの祖語から発しているとは、ちょっと想像しづらいが、これらの言語の音韻・形態・語彙等を調べると、借用や偶然の一致には帰すことが不可能な規則的対応が見出される。

図表1には、サンスクリット語、古代ギリシャ語、ラテン語、英語およびドイツ語[7]の基礎語彙の一部が挙げてある。中には「四」を表す catvā́raḥ, tḗssares, quattuor, four, vier のように一見かなり相違するものもあるが、大体互いに似ているという印象が得られるのではなかろうか。そして、より丁寧に観察すると、単なる相似にとどまらず、いくつかの音の対応が浮かび上がってくる。たとえば、「父」「足」「五」においては、サンスクリット語のpが、英語とドイツ語ではfとして現れている。また、「歯」「二」「十」においては、サンスクリット語のdが、英語ではt、ドイツ語ではzとなっている。[8]

これらの言語が親縁関係にあることは、すでに十八

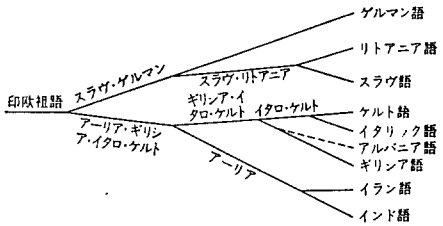
図表1　印欧諸語の基礎語彙の対応例

	サンスクリット語	古代ギリシャ語	ラテン語	英　語	ドイツ語
父	pitā́	patḗr	pater	father	Vater
母	mātā́	mḗtēr	māter	mother	Mutter
息子	sūnúḥ	huiós	—	son	Sohn
娘	duhitā́	thugátēr	—	daughter	Tochter
兄弟	bhrā́tā	phrā́tēr	frāter	brother	Bruder
足	pāt	poús	pēs	foot	Fuß
歯	dántaḥ	odṓn	dēns	tooth	Zahn
二	dvā́u	dúo	duo	two	zwei
三	trā́yaḥ	treîs	trēs	three	drei
四	catvā́raḥ	tḗssares	quattuor	four	vier
五	páñca	pénte	quīnque	five	fünf
十	dáśa	déka	decem	ten	zehn
あなた	tvám	sú	tū	thou	du

世紀末にイギリスの東洋学者ジョーンズ（William Jones, 1746-1794）が示唆しているが、これに対する学問的探究が始まるのは、十九世紀に入ってからである。まず、一八二〇年前後に、デンマーク人ラスク（Rasmus Rask, 1787-1832）とドイツ人グリム（Jacob Grimm, 1785-1863）が音韻・形態の対応規則を確立した。その後しばらくして、一八六〇年代にドイツ人シュライヒャー（August Schleicher, 1827-1868）が、この対応規則を印欧諸語相互間の関係としてではなく、「印欧祖語」を出発点とする発展として把えなおし、より合理的な説明を試みている。時あたかもダーウィンの進化論が一世を風靡していた頃で、彼は印欧語族を一本の系統樹として描いている（図表2参照）。このモデルはその後論破される運命にあるが、祖語の再建Rekonstruktionは、今日なお比較言語学の中心課題であり続けている。

印欧語の研究史に関しては、一八七〇年代以降の「青年文法学派」による音韻論の精密化、二十世紀に入ってからのトカラ語やヒッタイト語の発見等、述べる

図表 2　シュライヒャーの系統樹



（風間喜代三，『言語学の誕生』，岩波新書1978年，132頁による）

べきことはまだたくさんあるが、紙幅の都合上他の文献にゆずる。[9]

今日では、印欧語族は互いに系統的・接縁的に関連し合う次の諸語派（語族の下位グループ）から成ると考えられている（†は古語、太字は現在ヨーロッパで使われている言語を表す）。[10]

a　インド語派〜サンスクリット†語、ヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語、アッサム語、ビハーリー語、マラーティー語、シンハラ語、**ロマーニー語**（ジプシー語）など。

b　イラン語派〜アヴェスタ†語、ペルシャ語、パシュトー語、バルーチー語、クルド語など。[11]

c　ギリシャ語派〜**ギリシヤ語**。

d　イタリック語派〜オスク†語、ウンブリア†語、ラテン語、（以下ロマンス諸語）**ルーマニア語、モルダヴィア語、イタリア語、サルデーニャ語、レト・ロマン（諸）語、フランス語、プロヴァンス語、カタルーニャ語、スペイン語、ポルトガル語、ガリシア語**、ラディノ語（ジュデズモ）など。

e　ケルト語派〜**アイルランド語、スコットランド・ゲール語、マン島語、ウェールズ語、ブルトン語**など。

f　ゲルマン語派〜ゴート†語、**アイスランド語、フェロー語、ノルウェー語、デンマーク語、スウェーデン語、英語、フリジア語、オランダ語**、アフリカーンス語、**ドイツ語、ルクセンブルク語、イディッシュ語**など。

g　スラヴ語派〜古教会スラヴ語、**ブルガリア語、マケドニア語、セルボ・クロアチア語、スロヴェニア語、ポーランド語**[12]、**上部ソルブ語、下部ソルブ語、チェコ語、スロヴァキア語、ロシア語、ウクライナ語、白ロシア語**など。

h　バルト語派〜古プロシア語、**リトアニア語、ラトヴィア語**。

i　アルメニア語派〜アルメニア語。

j　アルバニア語派〜**アルバニア語**。

k　トカラ語派〜トカラ語。

l　アナトリア語派〜ヒッタイト語など。

二　印欧祖語はどのような言語か

このように数多くの言語に発展して行った印欧祖語とはどのような言語であったのか。――この問いに答える前に、まず確認しておかねばならないのは、比較言語学の歴史を通じて、祖語に対する見方も変わってきているということである。シュライヒャーにとっては、彼の再建した印欧祖語は、古代ギリシャ語やサンスクリット語と同じように、かつて実在した一言語であった。彼は祖語によって寓話を書くという芸当さえ見せている[13]。今日では、印欧祖語――少なくとも再建された形での印欧祖語――は、あくまでも印欧諸語の対応比較に基いて設定された仮構であると見なされている。

この前提を踏まえて、印欧祖語が備えていたと想定されるいくつかの特徴を、後の印欧諸語とも対比しながら見てゆきたい。ここでは、音韻・シンタクス等は省略し、形態についてのみ論じることをお許しいただきたい[14]。

印欧祖語はきわめて複雑な語形変化を持つ屈折型（分離不可能で多機能的な形態素――平たく言えば変化語尾など――によって文法関係を表す言語類型）の言語であったと考えられている。

まず名詞類（名詞・形容詞・代名詞・数詞）[15]を見てみると、これは性・数・格に従って語形変化（曲用）した。

性には男性・女性・中性の三つが存在したとされて

いる。[16] 今日でも、ドイツ語やアイスランド語、スラヴ語派の諸言語、ギリシャ語などはこの三性を保持している。しかし、ロマンス諸語（ルーマニア語を除く）のように男性・女性の二性（男性が中性を吸収）に減少しているものも多く、中にはデンマーク語やオランダ語のように共性・中性の二性（男性と女性が共性に合流）となっているものもある。そして、最も単純化したのが英語、アフリカーンス語などで、これらは性の区別を失っている[17]（図表3参照）。

これらの性は文法（的）性であり、自然性とは関連するものの、必ずしも一致しない。この一見不可思議な範疇は、印欧語族以外にアフロ・アジア語族やコイサン語族の一部などにも見られるが、日本語はもとより、ウラル語族、アルタイ諸語をはじめ大半の言語には存在しない。しかし、性という類別に似た現象は広範囲に観察することができる。つまり、性別の他に、生物対無生物、人間対非人間、物の大小・形状といった意味的類別が、文法的形態に顕在化する現象で、これは名詞クラス Nominalklasse と呼ばれる。どのような意味区分が名詞クラスを確立するかは、言語ごとに様々である。クラスの数も区々で、バントゥー諸語の中には二十数種近くを数えるものもあると言う。[18] 文法化の度合は低いが、日本語の類別詞 Klassifikator（「一人」「一匹」「一本」等）も、名詞クラスの表示と見なすことは不可能ではない。このように考えてくると、印欧語の文法性が決して特異な現象でないことが分かるであろう。

印欧祖語の名詞類の「数」は、性と同じく三種で、単数・双数・複数が存在したとされる。双数 Dualis とは文字どおり二つの物を指す数であるが、印欧語では一般に二つで一組の物、たとえば両眼、両親等に適用されたようである。[19] ただし、双数を保持しているのは、主にサンクスリット語、古代ギリシャ語など古語の一部だけで、ほとんどの現代語は単・複数の二種しか区別しない。例外はわずかにリトアニア語とスロヴェニア語、ソルブ語に見られるのみである。[20] しかし、性の場合のように、数の区別を一切失ってしまった言語は、印欧語族には存在しない（図表3参照）。

文法性が必ずしも自然性と一致しないように、数も自然界の数そのものではない。数に対する類別の意識が文法的形態に顕在化したものである。その顕在化の仕方は、名詞クラスの場合と同様、言語ごとに区々である。そもそも、日本語のように数の文法範疇を知らない言語も珍しくない。単・複数の区別をするものにはチュルク語族など、単・双・複数の区別をするものには印欧語族の他にアフロ・アジア語族（特にアラビア語）などがある。中には、三数・四数といった区分を持つ言語も見られると言う。[21] 印欧語族の大部分の言語が双数という古式ゆかしい数を失ったことは残念であるが、これによって数範疇を持たない我々の母語に

図表3　印欧諸語の名詞の性・数・格

言語名	性	数	格
サンスクリット語†	男女中	単双複	8
ヒンディー語	男女	単　複	2
アヴェスタ語†	男女中	単双複	8
ペルシャ語	—	単　複	—
古代ギリシャ語†	男女中	単双数	5
現代ギリシャ語	男女中	単　複	4
ラテン語†	男女中	単　複	6
ロマンス諸語（ルーマニア語以外）	男女	単　複	—
ルーマニア語	男女中	単　複	5
古アイルランド語†	男女中	単双複	5
現代アイルランド語	男女	単　複	2
ゴート語†	男女中	単　複	5
アイスランド語	男女中	単　複	4
デンマーク語	共　中	単　複	2
英語	—	単　複	2
オランダ語	共　中	単　複	2
アフリカーンス語	—	単　複	—
ドイツ語	男女中	単　複	4
古教会スラヴ語†	男女中	単双複	7
ブルガリア語	男女中	単　複	—
スロヴェニア語	男女中	単双複	7
ロシア語	男女中	単　複	6
古プロシア語†	男女中	単　複	4
リトアニア語	男女	単双複	7
アルメニア語	—	単　複	7
アルバニア語	男女	単　複	5
トカラ語†	男女中	単双複	4
ヒッタイト語†	共　中	単　複	8

（†は古語，太字は現代ヨーロッパの言語）

一歩近づいたとも言える。

印欧祖語の格は性や数よりも多様で、主格・呼格・対格・属格・与格・奪格・所格・具格の八つが存在したと言われる。[22] これらをすべて兼ね備えているのは最古期の言語に属すサンスクリット語とアヴェスタ語のみである。[23] 一般には、いくつかの格の融合 Synkretismus によって、格の種類の減少を来たしている。それでも、スラヴ語派の大部分やバルト語派は現在なお六ないし七格を有すが、ロマンス諸語（ルーマニア語以外）は名詞の格の範疇を全く失っている。また、同じゲルマン語派でも、ドイツ語のように四つの格を持つものもあれば、英語のようにかろうじて二つの格を持つ（しかも属格の使用は限られる）もの、アフリカーンス語のように全く持たないものもある。「保守的」なスラヴ語においてさえ、ブルガリア語とマケドニア語はもはや名詞の格を区別しない[24]（図表3参照）。

格とは名詞類の文中における働き（シンタクス関係）を示す文法範疇である。印欧祖語の八格が必要十分な数字でないことは、格の種類を削減した印欧諸語のシンタクスに何ら障碍が生じていないことからも分かる。これらの言語においては、格体系が負っていた機能の一部が前置詞や語順に転嫁されたにすぎない。一方、印欧語族から外に目を転ずると、コーカサスのタバサラン語やラック語のように、何と五十近くの格を駆使するものもあると言う。[25] 比較的馴染みのあるところでは、フィンランド語が十五格を区別するが、これらの格の大半は空間関係を表すもので、印欧諸語ならば前置詞に頼るところである。これらの言語を見ると、印欧祖語の八格は決して多すぎるとは言えない。しかし、フィンランド語の格語尾などは、あらゆる名詞に対して一通りの形態のものしか用いられない。[26] いわば、格助詞が十五個あるようなもので、大して込みいったことにはならないのである。

それに引きかえ、印欧祖語の場合、名詞類の語形変化は複雑をきわめる。それは単に、八つの格の他に、三つの性、三つの数があるという理由からではない。事を複雑にしているのは、これら三つの範疇が渾然一体となって語形変化を形造っている点である。

実例をもとに話をした方が分かりやすいであろう。図表4は男性名詞（o語幹）*ekwos「馬」（＞ラテン語equus）の単・複数格変化を示したものである。（*は再建形の印）。これだけでも相当なものだが、実際にはさらに双数が加わる。その上、これとは別の仕方で、

図表4　印欧祖語 *ekwos の変化

	単　　数	複　　数
主格	*ekw-o-s	*ekw-o-es＞*ekwōs
呼格	*ekw-e	*ekw-o-es＞*ekwōs
対格	*ekw-o-m	*ekw-o-ns
属格	*ekw-o-syo	*ekw-o-om＞ekwôm
与格	*ekw-o-ey＞*ekwōy	*ekw-o-ibh(y)os
奪格	*ekw-o-od＞*ekwôd	*ekw-o-ibh(y)os
所格	*ekw-o-y	*ekw-o-isu/-isi
具格	*ekw-o-o/e＞*ekwô/ō	*ekw-o-oys＞*ekwôys

（ロックウッド，永野芳郎訳『比較言語学入門』，大修館1976年，124頁以下による）

さまざまな語幹（＝変化系列）の男・女・中性名詞が、それぞれ単・双・複数において格変化をするわけである。しかし、問題は変化表の量ではなくて質である。たとえば、*ekw-o-om の語尾 -om は、この語形が男性であり複数であり属格であるということを同時に表している。この語尾を性・数・格の表示機能に従ってこれ以上分解することはできない。同様の現象は、サンスクリット語や古代ギリシャ語はもちろんのこと、現代ドイツ語でも観察することができる。定冠詞 der は男性・単数・主格の形であるが、どの部分が性を表し、どの部分が数また格を表すかは全く不分明である。このように屈折型言語は、形態と文法機能が一対一で対応する膠着型言語（たとえば、トルコ語では evler-imin「私の家々の」を、ev「家」、ler「複数」、im「私の」、in「属格」のごとく分解できる）に比べて、不合理な面を持っている。[27]

以上、名詞類の話だけで相当紙数を費してしまった。動詞に関してはごく簡単に触れるにとどめよう。印欧祖語の動詞は、二つの態（能動・中間受動）、四つの法

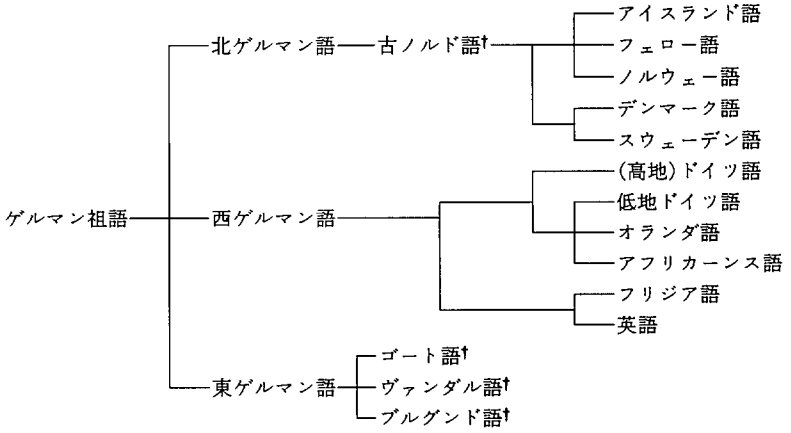
（直説法・接続法・希求法・命令法）、三つの時称（現在・アオリスト・完了）、三つの人称（一～三人称）、三つの数（単数・双数・複数）に従って語形変化（活用）したと考えられる。[28] つまり、ひとつの語形が五つの機能を一遍に担っていたわけで、名詞類以上に「屈折的」になっている。この多機能性は、サンスクリット語、古代ギリシャ語、ラテン語などでは健在で、時称に関しては拡充されてすらいる。しかし、現代語では一般に動詞語形変化は多少なりとも摩耗し、特に法や態は助動詞等によって表示されることが多くなった。

この章のはじめに、印欧祖語が複雑な語形変化を持つ屈折型の言語であると言った意味が、これで明らかになったと思う。このように想定された印欧祖語が、実際に存在したとして、果していつ頃どこで話されていたかに関しては、諸説の一致を見ない。黒海北岸の地域をいわゆる源郷 Urheimat とし、年代を紀元前三千年紀以前とすることが多いようだが、確証はない。[29]

三　印欧語としての英語とドイツ語

この印欧祖語から今日の英語やドイツ語に至るはるかな道のりを詳しく再現することは小論の範囲では不可能である。概略だけを述べると、紀元前二千年紀に、印欧語系の言語を話す人々がエルベ川下流域からスカンジナビア半島南部にかけての地域に移動してきて、非印欧語系の住民と融合し、ゲルマン民族が成立した。その言語は印欧語系であるが、消滅した非印欧語系の言語（基層 Substrat）から受け継いだと思われる諸特徴を含んでいる。これがゲルマン祖語であり、今日の英語やドイツ語の祖先と言うことになる。ゲルマン人は、紀元前千年頃にはヴェーザー川とオーダー川の下流域に進出し、前七五〇年までにヴァイクセル（ヴィスワ）河口域、前五〇〇年頃にはライン河口域からドイツ中部山岳方面に達したらしい。そして、紀元前後には、すでにいくつもの部族に分かれ、タキトゥスの『ゲルマーニア』に描かれているような領域に広がっている。

図表5　ゲルマン語の伝統的分類



(†は古語；下宮忠雄他『スタンダード英語語源辞典』，大修館 1989，622頁による)

ゲルマン諸部族がどのように分かれて行ったかという問題は、同時にゲルマン諸語の分類の問題でもあるが、残念ながら未解決である。伝統的には、東・北・西の三つのグループに分けられることが多い（図表5参照）。しかし、近年では、マウラー（Friedrich Maurer）が提唱した、エルベ・ゲルマン語、ヴェーザー・ライン・ゲルマン語、北海ゲルマン語、北ゲルマン語、オーダー・ヴァイクセル・ゲルマン語（東ゲルマン語）という五グループへの分類が比較的広く受けいれられている。この分類の主眼は、従来想定されていた西ゲルマン語という統一体、およびそこからの英語・ドイツ語等の分岐を否定することに置かれている。そして、ドイツ語はエルベ・ゲルマン語、ヴェーザー・ライン・ゲルマン語と北海ゲルマン語から、英語は北海ゲルマン語から成立したとし、いわゆる西ゲルマン語に見られる共通点は後の影響関係によるものと見なしている。北ゲルマン語と東ゲルマン語に関しては、従来の分類と基本的に異ならない。(30)

西ゲルマン語という統一体が存在しなかったにせよ、

英語とドイツ語が、ゲルマン語派の中でも比較的近しい間柄にあったことは確かである。この元来兄弟とも言うべき二言語は、しかしながら、今日ではほとんど対照的な文法体系を示している。たとえば、前章で述べた名詞の性や格における相違をいま一度想起されたい。ドイツ語が今なお印欧祖語以来の屈折的性格をある程度とどめているのに対して、英語は孤立型（古典中国語のように、語が変化せず、語順により文法関係を示す言語類型）と言っても誇張ではないような状況に至っているのである。このような相違は、両言語をともに習得しようとする者にとって厄介な現実と言わざるを得ないが、言語史的に見れば興味の尽きないテーマである。以下に、英語とドイツ語の顕著な相違点および共通点を、ゲルマン語、ひいては印欧語という背景のもとに検討し、両言語の関係を多少なりとも明確にしたいと思う。

図表6　第一次子音推移

A.

印欧語	p	t	k
ゲルマン語	f	th	ch

B.

印欧語	bh	dh	gh
ゲルマン語	b	d	g

C.

印欧語	b	d	g
ゲルマン語	p	t	k

（Bのb, d, gは元来有声摩擦音b̧, ḑ, ģであるが，後に大半が閉鎖音に移行した）

前章では、形態の問題に限って論じたが、ここではまずゲルマン祖語の音韻から見てゆきたい。すでに第一章で、サンスクリット語と英語の間にp～fあるいはd～tといった対応関係があることを確認した。この関係は、ゲルマン祖語が印欧語の子音体系にある種の編成替えを行なったことに起因する。この編成替えは、ゲルマン語派を他の語派から隔てる最も著しい特徴のひとつであり、第一次子音推移erste Lautverschiebung（または発見者の名を冠して「グリムの法則」）と呼ばれる。図表6にそれを示してあるが、A、無声閉鎖音→無声摩擦音、B、有声帯気閉鎖音（→有声摩擦音）→有声閉鎖音、C、有声閉鎖音→無声閉鎖音という、三系列からなる整然とした編成替えである。[31] 第一次子音推移の生じた時期は明らかでないが、大体紀元前一〇〇〇～五〇〇年頃であろうと言われている。

図表7　第二次子音推移

A.

ゲルマン語	p	t	k
高地ドイツ語	ff	ss	ch
	pf	z	kch

B.

ゲルマン語	b	d	g
高地ドイツ語	p	t	k

（Aにおいては，当該の子音が母音の直後の場合上段の摩擦音に，語頭・子音の直後・重子音の場合下段の破擦音になる）

英語は今日に至るまで、基本的にはこの推移によって成立した子音体系を保っている（先に図表1で列挙した英語の諸々の語形も、この推移によるものとして説明できる）。他の多くのゲルマン諸語に関してもおおむね同じことが言える。ただ、ドイツ語（および後にこれから分離したイディッシュ語、ルクセンブルク語）のみは、若干異なった様相を呈している。

というのは、ドイツ語においては、第一次子音推移を経た子音体系が、紀元後五～八世紀頃にかけて、さらにもう一回の子音推移を経験したからである。第一章で指摘した英語t～ドイツ語zという対応も、その結果成立したものである。この第二次子音推移zweite Lautverschiebungは、第一次子音推移よりは狭い範囲の子音に限定されるが、図表7の二系列からなるやはり整然とした編成替えである。この現象は、高地ドイツ語子音推移という別名があることからも分かるとおり、低地ドイツ語では起きていない（高地および低地ドイツ語の境界は、非常に大ざっぱに言ってケルンとベルリンを結ぶ線に近い）。また、高地ドイツ語でも、この推移が完全な形で実現したのは、南部のアレマン方言とバイエルン方言のみである。中部ドイツ語ではAのk→kch、Bのb→p、g→kの変化は生じなかった（結局、中部ドイツ語の語形が今日の標準ドイツ語形となっている）。このような第二次子音推移の他に、八世紀以降徐々に高地ドイツ語域に広まり、後には低地ドイツ語・オランダ語域にまで及んだth（→đ）→dの変化があった。[32]

このように、一般的には英語より保守的であると考えられるドイツ語が、こと子音体系に関しては、より大きな変革を行なっているのである。[33] しかし、英独間

図表 8　英語・ドイツ語の子音対応の実例

対応パターン			実　例		
(印欧語)	ゲルマン語	ドイツ語	英　語	ドイツ語	(低地ドイツ語)
(b)	p	ff	open	offen	(open)
		pf	plant	Pflanze	(Plant)
(d)	t	ss	water	Wasser	(Water)
		z	tongue	Zunge	(Tung)
(g)	k	ch	make	machen	(maken)
(dh)	d	t	day	Tag	(Dag)
(t)	th	d	thing	Ding	(Ding)

の対応関係は明瞭なので、一方の語形から他方の語形を推測することもさほど困難ではない。図表8に、英独の子音対応例を挙げておく。

音韻に関してはこのくらいにして、ここで形態の問題に入ろう。まず、すでにゲルマン祖語の段階で、印欧祖語の複雑な形態体系がある程度の単純化を経ている点を指摘しなければならない。たとえば名詞類においては、双数形は代名詞にのみ残っている。また、印欧語の名詞の八格のうち、具格・所格・奪格は大体与格と融合していたと思われる（ただし、古高ドイツ語などの一部の名詞には依然具格形が残存している）。図表9に、ゲルマン祖語の男性名詞（a語幹＝印欧語o語幹）*dagaz「日」、およびそのゲルマン諸語における対応語の単・複数格変化を挙げた（呼格は省略）。このゲルマン祖語の変化形と、図表4に記した印欧祖語 *ekwos の変化形とを比べると、前者がかなりの変遷ないし弱化を経験していることが分かる。とは言っても、印欧祖語との関連を読み取ることは十分に可能である。

図表9　ゲルマン祖語 *dagaz とゲルマン諸語における対応語の変化

		ゲルマン祖語	古語		現代語		
			古英語	古高ドイツ語	英語	ドイツ語	アイスランド語
単数	主格	*dagaz	dæg	tag	day	Tag	dagur
	属格	*dagesa	dæges	tages	day's	Tag(e)s	dags
	与格	*dagai	dæge	tage	—	Tag(e)	degi
	対格	*dagan	dæg	tag	day	Tag	dag
	具格	*dagō	dæge	tagu	—	—	—
複数	主格	*dagōz	dagas	taga	days	Tage	dagar
	属格	*dagōn	dagas	tago	days'	Tage	daga
	与格	*dagamiz	dagum	tagum	—	Tagen	dögum
	対格	*dagans	daga	taga	days	Tage	daga

（ゲルマン諸語の一部の語形は，左のゲルマン祖語形に溯らない；現代英語の名詞の格は共格と属格の2つのみとなっているが，ここでは便宜上共格を主格と対格に分けて表示した）

次に、同じ図表で古英語と古高ドイツ語（ともに十一世紀以前）の語形を見てみよう。この時期には、英語の名詞類も、まだドイツ語と同様に性・数・格に応じて律儀に（？）変化をしていた。ただ、変化語尾は英独ともにゲルマン祖語よりもさらに弱化の度合を進めている（このように着々と語尾弱化が進行するのは、ゲルマン語において強弱アクセントが語幹音節に固定されたことに起因すると言われる）。しかし、文法的機能を担うに足る多様性はなお保持している。また、古英語と古高ドイツ語の間の類似も目につく。今でこそ鬼子のように見える英語も、当時はドイツ語の兄弟たること一目瞭然であった。

ここでいよいよ現代語に移ろうと思うが、その前に、中英語（十二～十五世紀）の時代に完結した重大な変革に言及しないわけには行かない。つまり、文法性の消失である。この由々しい事件が発生した原因は、何よりも語尾弱化（消失）に求められる。この弱化は、上述のとおり、ゲルマン語族に共通のものであるが、英語においては特に速やかに進行した。そして、名詞

や冠詞の形態上の区別が失われ、そのことがさらに範疇そのものの消滅を招いたのである。[34]

このような語尾の弱化は、格・数を表す語尾変化にも当然影響を及ぼした。現代英語の名詞変化が、わざわざ「変化表」にするほどの代物でなくなっているのは自明であるが、現代ドイツ語のそれも、こうして改めて表にしてみると、英語と五十歩百歩であることが分かる。単数与格（3格）の語尾 -e は今日ではふうつ用いられないから、ドイツ語が英語より複雑であるのは、複数与格で -n が付く点だけである（女性名詞は単数属格（2格）の語尾すら欠く）。文法性を度外視すれば、このように英語とドイツ語の名詞は同じような発展段階（シュライヒャー流に考えれば「堕落」の段階）にあると言える。しかし、この語尾弱化の埋め合わせの仕方は両言語でかなり異なる。英語は、格語尾の喪失、ひいては一部の格の消滅を、主に語順（文頭＝主語など）と前置詞によって補塡している。一方、ドイツ語ではとりわけ冠詞が格の表示機能を受け持ち、前置詞等がこれを補う形を取っている。[35] 冠詞という機能語に頼る点では、屈折型から一歩脱却したと言えるが、ドイツ語の冠詞自体は、第二章にも述べたとおり、性・数・格が渾然一体となった変化を今なお守っている。この屈折性の維持が、ドイツ語の文法を英語のそれよりも難しく見せる一因となっている。とは言え、今日に至っても名詞自体が複雑な変化を示すアイスランド語に比べれば、ドイツ語はむしろ英語に近いとも言える。[36]

以上、第二章と同様、名詞の形態について長広舌をふるい、紙数も時間も（気力も）尽きてしまった。本当は、英独ともに印欧語的性格を比較的良く伝えている、強変化動詞の母音交替（英語 sing～sang～sung、ドイツ語 singen～sang～gesungen など）の問題等に関してさらに話をするつもりであったが、別の機会にゆずる。

また、英語とドイツ語の間の最も大きな共通項である語彙に関しても、他のゲルマン諸語や印欧諸語と比較しつつ、論じる予定であった。残念ながら、これも今回は断念せざるを得ない。このことについては、音

韻対応のところで若干実例を挙げておいた（図表8）ので、参考にしてさらなる対応語彙を収集してみては如何か。

（1）この種の入門講義にしては、少し註を付けすぎました。時間の無い方は、註は読みとばしても、理解に支障ありません。なお、註に挙げる参考文献は、極力日本語で書かれたものに限りました。

（2）「とにかく、日本語は系統的に煮ても焼いても食えない代物で、その親縁がさまざまな言語に求められてきたが、いまだに確信をもって親族であると認められるのは琉球語を除いて外にない（小泉保「日本語とは」、月刊『言語』一九八八年五月号所収、二七頁）」

（3）以下、主要な術語にはドイツ語訳を付す。なお、印欧語族は、ドイツ語圏ではむしろインド・ゲルマン語族 indogermanische Sprachfamilie と呼ばれることが多い（旧東独は例外）。

（4）田中克彦、H・ハールマン『現代ヨーロッパの言語』、岩波新書　一九八五年、一六頁によると、印欧諸語の話者数はヨーロッパの全人口の九四・四パーセントを占める。同書は、ヨーロッパ諸語の話者数・通用域等に関するデータを、死滅寸前の小言語に至るまで網羅している。ただし、トルコ語（ヨーロッパ・トルコ、ブルガリアの少数派、そして出稼ぎ労働者によりとりわけドイツで話される）に関する一章は欠落している。

（5）言語間の親近性は、しかし常にポジティヴに働くとは限らない。たとえば、ロマンス諸語の間には次のような多くの faux amis「にせの友達（音、字面が似ていても意味が異なる語）」が存在する。イタリア語 largo「幅の広い」に対してスペイン語 largo「長い」、イタリア語 salire「登る」に対してスペイン語 salir「出る」など。Mario Wandruszka: Die Mehrsprachigkeit des Menschen, München 1979, S. 217 f. を参照。

（6）問題となるのは言語の親縁関係である。民族的同系性は前提にならない。

（7）比較言語学においては、残存する限りの最古の言語層を資料とするのが原則だが、ここでは話を分かりやすくするために現代英語、現代ドイツ語の例を挙げる。

（8）つまり、音の規則的対応こそが重要なのであって、音や字面の類似は実は直感的ヒント以上の役割を演じない。単なる類似は借用によっても生じうるし、偶然の空似ということもありうる。たとえば、ドイツ語の haben「持っている」とラテン語の habēre「持ってい

る」とは、字面・意味ともに酷似している。しかし、音韻規則によりドイツ語のhはラテン語のcに対応するので、これらの語におけるhの一致はむしろ別起源の証明となる（ドイツ語habenは実はラテン語capere「捕える」と同源）。逆に、アルメニア語erku「二」とラテン語duoのように一見全く似ていない語でも、手順を踏んで音韻対応が証明できれば、同源ということになる。A・メイエ、泉井久之助訳『史的言語学における比較の方法』、みすず書房　一九七七年、一九頁以下参照。

(9)　詳しくは、風間喜代三『言語学の誕生』、岩波新書　一九七八年を参照。同書は比較言語学の発展を思想史的背景をも踏まえて解説した好著である。

(10)　語派の分類は基本的に風間喜代三「インド・ヨーロッパ語」（亀井孝他編『言語学大辞典』第一巻、三省堂　一九八八年所収）に従う。註7に述べたとおり、古語の方が資料価値が高いが、ここでは現代語を中心に挙げ、特に現代ヨーロッパ諸語は網羅すべく努めた。これら新旧の印欧諸語をまとめて解説したものに、W・B・ロックウッド、岩本忠訳『インド・ヨーロッパ諸語の展望』、三修社　一九八七年があるが、残念ながら誤記・誤植が夥しい。むしろ、『言語学大辞典』、第一～四巻、三省堂　一九八八～九二年の各項目を見た方がためになる。

(11)　インド語派とイラン語派は合わせてインド・イラン語派とされることが多い。

(12)　ポーランド語のカシューブ方言を独自の一言語と見なすこともある。田中、上掲書（↓註4）、一八一頁以下参照。

(13)　この寓話は、風間、上掲書（↓註9）、二五一頁以下に収められている。

(14)　印欧祖語の音韻・形態・シンタクスに関する総合的記述としては、高津春繁『印欧語比較文法』、岩波全書　一九五四年がある。松本克己「印欧言語学への招待、1～6」（月刊『言語』、一九八八年一～六月号所収）は、網羅的ではないが、最新の学説を踏まえた明快な論述である。

(15)　印欧祖語には冠詞は存在しない。これは、後代に各語派・言語が個別に数詞・指示代名詞等から発展させたものである。現代でも、たとえばスラヴ語派（後置冠詞を持つブルガリア語とマケドニア語を除く）は冠詞を知らない。

(16)　印欧祖語の三性体系に先行する段階として、有生・無生という二性体系が存在したと考えられている。松本、上掲論文（↓註14）、6（六月号）参照。

(17)　ここで数えたのは名詞の性の種類である。人称代

名詞ならば、英語は三性、デンマーク語は四性（男・女・共・中性）等となるが、この場合の男・女性は自然性に等しい。

(18) 西江雅之「アフリカの言語におけるクラスと数」（月刊『言語』、一九七八年六月号所収）、三八頁以下参照。

(19) 印欧語における双数の成立と発展に関しては、泉井久之助『印欧語における数の現象』、大修館　一九七八年に詳しい。

(20) リトアニア語の双数は今世紀初めまで維持されたと言う。村田郁夫「リトアニア語」（『言語学大辞典』、第四巻、三省堂　一九九二年所収）、七六三頁参照。今でも双数を用いるスロヴェニア語とソルブ語に関しては、А. Г. Широкова/В. П. Гудков: Славянские языки, Moskau 1977, S. 184 ff., 302 ff. を見よ。なお、代名詞の双数は北フリジア語にも見られる。清水誠「北フリジア語モーリング方言（1）文法」（『北海道大学文学部紀要』、40―3、一九九二年所収）、九九頁以下参照。

(21) 泉井久之助『言語の構造』、紀伊國屋　一九六七年、五七頁参照。

(22) 格の用法に関しては、高津、上掲書（→註14）、二〇〇頁以下参照。

(23) ヒッタイト語も八格を持つが、ここでは与格と所格が融合し、新たに方向格が生じている。大城光正、吉田和彦『印欧アナトリア諸語概説』、大学書林　一九九〇年、三一頁参照。

(24) 人称代名詞ならば、ロマンス諸語は主格・対格・与格、アフリカーンス語は主格・対格・属格、ブルガリア語・マケドニア語は主格・対格・与格を区別する。

(25) 泉井、上掲書（→註21）、六一頁以下参照。

(26) 厳密に言うと、母音調和（語尾に現れる母音の種類が語幹の母音に制約されること）のため、二種類の変種が存在する。

(27) 屈折型を言語の最高の発展段階と考えた十九世紀ヨーロッパの言語学者は、手前味噌としか言いようが無い。なお、印欧語には膠着型の前段階も想定されている。松本、上掲論文（→註14）、6（六月号）参照。

(28) 動詞体系に関しては、W・B・ロックウッド、永野芳郎訳、『比較言語学入門』、大修館　一九七六年、一三五頁以下に分かりやすい解説がある。

(29) 源郷の問題に関しては、風間喜代三「印欧語族の源郷」（月刊『言語』一九七八年十一月号所収）を参照。

(30) H・モーザー、国松孝二他訳『ドイツ語の歴史』、白水社　一九六七年、九一頁以下参照。

(31) これには、いわゆるヴェルナーの法則等の例外が

あるが、煩雑になるので省略する。P・ポーレンツ、岩崎英二郎他訳『ドイツ語史』、白水社　一九七四年、二〇〇頁以下参照。

(32)　第二次子音推移等に関する詳細は、ポーレンツ、上掲書（↓註31）、三五頁以下参照。

(33)　一方母音に関しては、英語が十四～十七世紀にかけての大母音推移 große Vokalverschiebung 等のために、より大きな改変を経験している。大量に出回っている『英語史』のいずれかを参照せよ。

(34)　L・モルスバッハ、中島文雄訳『英語の文法的・心理的「性」』、研究社　一九六八年、三四頁以下参照。

(35)　標準ドイツ語は具格を除く四つの格を保持してるが、大方の方言は属格を失い、「von＋与格」(die Hälfte von dem Apfel「林檎の半分」など)、または「与格＋所有代名詞」(dem Vater sein Haus「父の家」など）によって表現している。また、北ドイツの方言では、与格が対格（4格）に吸収されている。O・ベハーゲル、桜井和市他訳『ドイツ語学概論』、白水社　一九七二年、二二三頁以下参照。

(36)　ドイツ語の名詞類の学習において本当に困難なのは、冠詞等のささやかな変化表を暗誦することではなく、個々の名詞がどの性に属し、どうやって複数形を作るかを一々覚えなければならないことである。アイスランド語やロシア語のように複雑な語形変化を維持している言語の場合、個々の名詞の性ないし変化系列はその語形から判断がつくことが多い。たとえば、ロシア語においては、名詞の単数主格形が硬子音で終われば男性、aで終われば女性、oで終われば中性と言うことができる。この点ドイツ語は、語形が（中途半端に）摩耗してしまったため、「eで終わる名詞には女性が比較的多い」といったきわめて大まかな傾向を指摘する以上のことはできない。

（一橋大学助教授）